

## 2025年12月28日降誕後第1主日

旧約聖書 イザヤ書6章7—9節  
使徒書 ヘブライ人へ手紙2章10—18節  
福音書 マタイによる福音書 2章13—23節

本日は、降誕後第1主日です。2025年という時間の区切りでは、最後の日曜日・主日の礼拝となります。

新しい聖書日課となり、本日の福音書は、東方博士たちの幼子イエス様訪問後、ヨセフとマリアとイエス様がエジプトに避難し、戻ってくるお話です。博士たちの訪問を記念する日が顕現日ですが（クリスマスシーズンが終わります）、以前の聖書日課では、ABC年共通で、降誕後第2主日の福音書の選択となっていました。また、2章の16から18節は省略されていました。教会の暦との整合性が取れない点は同じですが、教会では伝統的に三人の博士のお話もクリスマスの物語にいれて学びます。ぶどうの木の今年のペーパーでも、博士役がありました。また、新しい聖書日課は、省略されていた部分も読みますので、新しい聖書日課は、より良いものとなったと思います。

さて、東方の博士たちは、何の研究者かというと、占星術の専門家と考えられます。彼らは、自分たちの星の分析を通して、見知らぬ国の新しい王の誕生を察知して、いち早くその誕生をお祝いするために訪れたのです。彼らは星に導かれて歩んできたのですが、幼子イエス様に会って、本日の箇所の直前の部分に、「それから、『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分の国へ帰って行った」（マタイ2:12）とある通り、自分たちの道標を、「星」から「夢」へと変えて、新たに歩み始めたのでした。

この「星」と「夢」という二つの事柄は、マタイ福音書におけるイエス様の誕生物語（マタイ1:18から2:23）において重要な要素です。登場人物たちの行動選択の道標となっているからです。「星」を占星術などの科学的判断、広く考えて人間の理性的判断の道標とするならば、「夢」は、神的あるいは靈的判断の道標です。そもそもヨセフは、「このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れずマリアを妻に迎えなさい。マリアに宿った子は聖靈の働きによるのである」（マタイ1:20）とある通り、「夢」の指示に従って律法を超えた判断をしたので、イエス様は誕生できたのでした。東方の博士たちも先ほど触れた通り、それまで自分たちの研究成果である「星」の導きに従っていたのですが、最終的に「夢」で導かれ自分の国へ帰っていました。彼らはおそらく、新しい王の誕生のお祝いに駆け付けたことで、それなりの報いをもらうことを期待していたのでしょう。しかし、彼らが、自分たちの求めていた報いとは、比較にならないほどの宝を得たであろうことは、よくクリスマスの物語で語られる通りです。しかし、彼らの行為は、思いもよらない結果を生みます。それがそれまで聖書日課では省略されていた16から18節のお話です。ヘロデ王が、新しい王の誕生を恐れ、その抹殺を図るお話です。

イエス様は、ヨセフが「夢」に従ってエジプトに逃れたことで助かります。し

かし、その代わりに、ベツレヘムの2歳以下の男の子が虐殺されます。物語の語り手は、「さて、ヘロデは博士たちにだまされたと知って、激しく怒った。そして、人を送り、博士たちから確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいる二歳以下の男の子を、一人残らず殺した」(マタイ 2:16)と淡々と告げますが、何とも言えない残酷なお話です。

ヘロデ王は、で人間の理性を用いてもっとも確実な方法を用いたのでした。どの男の子が新しい王に該当する子かなど、いちいち調べることなく、すべての男の子を虐殺するという方法で、新しい王の抹殺を実行したのでした。博士たちも戻っていたならば、そんな人たちは最初から来なかつたということされていたでしょう。語り手は、「その時、預言者エレミヤを通して言われたことが実現した。『ラマで声が聞こえた。激しく泣き、嘆く声が。ラケルはその子らのゆえに泣き、慰められることを拒んだ。子らがもういないのだから。』」(マタイ 2:17-18)と、それが約500年近く前の預言の通りであったと告げます。ここはエレミヤ書31章15節からの引用です。新約聖書でエレミヤ書が明確な形で引用されるのはこの箇所のみです。また、この箇所は、エレミヤ書31章31節に「その日が来る——主の仰せ。私はイスラエルの家、およびユダの家と新しい契約を結ぶ」とある通り、31章全体が「新しい契約」について記している箇所です。その意味では、イエス様の誕生の物語にその預言の成就があることは意味深いのですが、自分の子どもを失った人々からいえば、救い主の誕生のため、預言の成就のため、ありとあらゆる説明の言葉を用いたとしても、納得はいかない出来事です。

マタイ福音書は、イエス様の誕生を語る時、この出来事に触れるように記しています。それが事実起こったことなのか、それともイエス様の誕生と「新しい契約」に関する預言との結びつけのための創作なのか、確認することはできませんが、イエス時代の独裁者的王のあり方から考えれば、実際に起こる得ることであったと思います。

ここから学ぶことは二つあります。一つは、「星」を代表としているような理性的判断とは異なる判断、マタイ福音書のクリスマスの物語で「夢」によって導かれると表現されている判断の大切さです。理性的判断はよいものを生み出すかもしれません、ヘロデのような判断も生み出すからです。しかし、マタイ福音書は、律法を守ることを重要視している福音書であり、理性的判断に基づいて律法を守ることを否定していません。そのことが二つ目を示します。それは、マタイ福音書にあるイエス様の生涯を通して示される愛を模範にして、律法を守ることです。言い方を変えれば、イエス様の愛を模範にして、理性的判断を下すことです。

わたしたちは、クリスマスを通して、イエス様という、まことの道標が誕生したことを、まず喜びたいと思います。そして、イエス様が示す愛を無視して歩むとき、何が起こるかも学びたいと思います。2025年の次は2026年、そのような暦の区切りは、人間的判断にほかなりません。しかし、だからこそ、それを超える愛の判断を教えてくださったイエス様を覚え、新しい年を迎えるといふ思います。